

あと何日？

平日の昼間、息子と2人で過ごす時間は、あと何日あるのだろう。夜にしっかり寝てもらいたいの、日中はできる限り外に出て遊んでいる。公園、子育て支援センター、幼稚園の園庭開放…。昼寝のあと、アパートの敷地内にある砂場に行ったり、近所をお散歩、駅に行って電車を見たり…。



1時間に数本しか来ない電車を待っている間、息子は走り回っているけれど、時間ももったいないなあ〜とよく思っていた。でも、2人で電車を待っている時間も、公園で遊んでいる時間も、とても贅沢な時間なのかな〜と思うようになった。今しかない幸せな時間。一日一日と成長が感じられる息子との楽しい時間。

下の子が生まれたら、ゆっくりできないかもしれないし、外で遊べなくなるかもしれない。息子が保育園か幼稚園に行くようになるかもしれない。そう思うと、今、息子と2人でいる時間がいとおしくなる。



あとちょっと。大切に大切に過ごしたいな。つい怒りんぼうのママになってしまうけど。こんな時間を過ごしたこと、息子は覚えていてくれるかな。
(鈴木明美/久留米市)

笹の葉じゃないけれど…

昨日は七夕。わが家の次女&三女。せっせと折り紙を切って短冊をつくり、願い事を書いていました。が、笹を用意してなかったので、せっかくの短冊も飾るところがありません。大ブーイングの嵐。さあ、どうするお母さん(私)。



「とりあえず、織姫と彦星に見えるように外に吊るそう！ そしたらきっと願いも叶うよ」と、ベランダにあった洗濯用のピンチハンガーにぶら下げてみました。テキトーここに極まれり！

次女&三女、あっさり納得(え? いいの?)。ちなみに2人の願い事は…★おこられませんか(誰に?) ★ザリガニが死にませんように★へえくんたちも死にませんように(猫と犬のこと) ★ぼけもんになりたい★ぷりきわになりたい(注:ぷりきゅあ)★明日ともだちコレクションを買ってくれますように(?)

最後のお願いには「サンタさんじゃないよ」とツッコミましたが、「だから欲しいじゃなくて、買ってくれますようにって書いたの」とのこと。なるほどね〜。って、いやいややっぱ違うでしょ！ 来年こそは大きな笹を用意して、家族みんなでお願い事をしようね。
(加藤知子/さいたま市)



心に残る夏休み

テーマパークも旅行も、数えきれないほどに…行ったけれど、鮮明に記憶に残っている夏休みの思い出は、レジャー施設とかではなく、毎年行っていた山奥でのキャンプや、父の田舎での出来事です。まるで昨日のこのように、景色も笑い声も、そして匂いさえも鮮明に残っています。



友だちのお父さんが蜂の子を食べていたこと。ヒルに噛まれたカエルを何とか助けたくて、でも助けられなくて涙したこ

と。木の枝そっくりの虫に驚いたこと。夜、街灯の下で蝉の羽化する瞬間を眺め、美しさに感動したこと。たくさん実った木苺を友人と夢中で食べたこと。河童がいるという噂の川で、ドキドキしながら潜水して河童探しをしたこと。従兄のお兄ちゃんが鬼やんまをつかまえてくれたこと。キャンプで星空を眺めながら、父に聞いた星の話。「とても長い時間をかけて地球に届いている星の光だから、今見える星は、もうなくなってしまった星の光なのかもしれない…」。



自然との触れ合い、自然から教えてもらったこと。どれも皆、私の心に、脳裏に、深く深く残っている、私の大切な宝物です。

時折、目を閉じて、あの頃の楽しかった記憶をたどっています。息子や娘にも、楽しい夏休みの宝物が、たくさんたくさんできますように！
(中西朋美/川崎市)

そうめんと麦茶

実家のそうめんは、薬味がいっぱい。ネギ、大葉、ミョウガ、とろろ、大根おろし、生姜、納豆、すりごま、いり卵…。キュウリやトマトを刻んだのが出ていることもあります。時々、缶詰のみかんやさくらんぼが浮かべてあったりして、そんな日はうれしかったな。



母が首にタオルを巻いて、汗ビッシュヨリで、大きな鍋にい〜っぱいそうめんをゆでていた姿を思い出します。台所の熱気と換気扇の音、そうめんのゆでてる匂い…。それと、麦茶。

ゴクゴク、ゴクゴク、ゴクゴク！ 一日にどれくらい飲むのでしょうか。起きたら麦茶。ごはんも麦茶。宿題して麦茶。遊んで麦茶。お昼寝して麦茶。とにかく何かしたら麦茶をゴクゴク。「つくってもつくってもきりがない！」と、母がよく言っていました。

沸かした麦茶は冷まさないで冷蔵庫に入れられないので、流しの洗い桶に水を張ってヤカンごと入れて冷ますのですが、冷蔵庫の分がなくなってしまう、ヤカンから直接熱い麦茶を注いで、氷をたくさん入れて飲んでいました。出来たてだからまだ薄い麦茶が、氷で



薄まってさらに薄くて、ほとんど氷水みたいになってたっけ(笑)。

今、母となり台所に立つ私。暑い日に、薬味たっぷりのそうめんを食べられたこと、冷蔵庫を開けたら冷えた麦茶を飲めたこと、それってすごく幸せなことだったんだなあと思います。
(かまり/東京都)

一匹の蛙が、いのちの大切さを伝える童話

『ブンナよ、木からおりてこい』

作者、水上勉が、「数ある作品のうち、後世に残るのは『ブンナ』だろう」と語りました。今の時代に失われつつある「心」を養い育てる本。子育て中の母親はもちろん、すべての人へ。

お母さん大学 基本テキスト

水上勉作/若州一滴文庫刊
価格/1050円(税込)

※正本は書店で販売されていません。お申し込みはトランタン新聞社まで。

<申込先> 株式会社トランタンネットワーク新聞社 お母さん大学
〒221-0055 横浜市神奈川区大野町 1-8-406 <http://www.okaasan.net/>
TEL045-444-4030 FAX045-444-4031 E-mail: info@30ans.com

子育て応援団 (企業・団体)募集!

『月刊お母さん業界新聞』は、一般のフリーペーパー(広告紙)ではなく、子育てをしているお母さんたちが、心から笑顔になるための媒体です。この新聞をひとりでも多くの母親たちに読んでいただけるように、子育て応援団(企業・行政・団体)を募集しています。企業のCSR、地域の活性化、子育て支援、社員教育、販売促進、企業のノベルティ、プロモーション版など、『月刊お母さん業界新聞』のコンテンツを活用したプロモーションをご提案します。

株式会社トランタンネットワーク新聞社

【お母さん大学】<http://www.okaasan.net/>
【トランタン新聞社】<http://www.30ans.com/>

ぼくがいないと寂しい？

年長の息子がボソッと言った。「ねえママ、さみしいよね?」。突然、何を言い出したのかわからず聞き返す。「え? 何でママが寂しいの?」。息子が語り出す。「今度の保育園のお泊り会。ママ、おれがいないときさみしいよな〜と思ってさ。ママがさみしいとかわいそうだから、お泊り会、休んでもいいんだけど…」。



真剣な表情で語る息子がおかしくて、笑いそうになるのをこらえながら返答する。「あー、お泊り会の日ね〜。心配しなくていいよ。パパもばあちゃんもいるから、ママは大丈夫! お友だちとみんなで楽しんできて〜♪」

すると息子の表情が一変した。「ママ、寂しいでしょ! おれがいないんだよ!!?」。怒ってる?

「だって、せっかくお友だちと楽しく遊べるお泊り会なのに、ママが寂しいって言ったら困るでしょ。ママの心配しなくてもいいから、楽しむことだけを考えて」っていうか、なんで怒ってるの?

すると、「だって! おれがいないのに、ママが寂しくないって言うからさ。さみしかったら、休んであげるって言うてるのにー!」。

あー、そうか。自分が寂しいんだ。ママのせいにして、口実を考えてるんだねー(笑)。

そこで…「ママさ、寂しくないとは言っていないよ。そりゃー、タカがいなかったら寂しいさっ。だけどね、お友だちと過ごす時間も楽しいし、それも大切なことだと思うんだよね。だからママは、行ってきてほしいな。ママはパパと一緒に『今頃、タカはお友だちと何してるのかな〜』って、タカのこと考えてお話ししながら待ってるからさ」そう言ってみた。

すると、ちょっと安心したような表情になり、「ママも我慢するの? お休んでもいいんだけど…。楽しいかな〜? ママも小さいとき、お泊り会に行ったの?」。

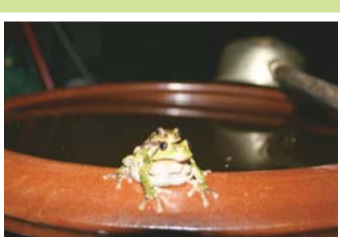
「うん、行ったよ〜。みんなでゲームしたり、お話ししたり、花火したりして、すごく楽しかったよ。だからさ、タカもお泊り会に参加して、楽しい時間を感じてほしいな〜。ママの心配はしなくてもいいからさ。ちゃんと帰りを待ってるからさ」。

そんなこんなで、やっと行く気になってくれたようです。「寂しい」「ママと一緒にいい」そんなことを言ってくれるのは、今のうちだけなんだよね。だからママは、そんなかわいい一言一言を漏らさず楽しませてもらいます!

こんな些細な出来事を重ねて、子どもも親も、少しずつ成長するんだね。そしてたぶん、近い将来、ママが「寂しいな〜」って思う日が来るんだろうね。(山森波江/札幌市)

すずめの涙

お天気の朝は早起き、それが日曜ならもっと早起き。その日も伸びた草を引いていました。



玄関の穴あきレンガで育ったすずめの子が、そろそろ巣立ちの時期。親が近くへ来て誘います。

上空の騒がしい声にふと手を休めて空を見上げると、カラスにさらわれた子どもを、お母さんすずめが必死に追いかけています。大きなカラスに立ち向かう姿とすずめの叫び声に、胸が詰まる思いでした。まさに「ブンナよ、木からおりてこい」※の世界が、すぐそこで繰り広げられています。自然界の厳しさだから仕方がない!? でも、リアルすぎてショック、落ち込む私。

「でもね! 強いよ、残されたすずめ」。数時間無言で待つ! カラスの怖さを教え、用心深く出てきた子は…柔らかな羽をパタパタさせて、次の瞬間、飛んだ!

やったあ〜、泣けた〜! すずめの涙と私の涙、一緒に涙。
(泉田美江/登別市)

※「ブンナよ、木からおりてこい」(水上勉著)は一匹の蛙の物語。お母さん大学では、命の大切さと人生の意味を伝える基本テキストとしています。